

幼児期の子どもの発達と「環境」領域の要素との関係

～幼稚園の「遊び集」から～

岡 島 俊 哉

Relationship of Environmental Factors and the Play with water
in the Development of Children in Early Childhood
～ From a Book that collects play in Kindergarten ～

Toshiya OKAJIMA

要 旨

佐賀大学文化教育学部附属幼稚園「遊び」研究会により出版された「遊び集」及び研究紀要第12集を題材として、151個の遊びと「環境」領域で扱う内容11項目との関係について調べた。また、遊びのうち、環境要素として、「水」に関する遊び29個を抽出し、子どもと「環境」及び「環境要素」の関わり、「自然」に親しむ感覚はどのように培われるか、他の4つの領域で扱う項目との関係、大人（教師や親）の関わり方について、幼児期における子どもの教育について文系・理系を問わず、それらが均等に融合された世界（自然観）を大人が有することが、子どもの成長と発達に大切であることを提案した。

[1-1] 研究の背景～はじめに～

「環境」とは、辞書などによると、「①めぐり囲む区域。②四囲の外界。周囲の事物。特に、人間または生物をとりまき、それと相互作用を及ぼし合うものとして見た外界」と定義されている。そしてこれまで、自然環境のように「環境」という言葉の前にさまざまな修飾語が添えられて、ある一定の範囲を対象に「環境」が語られてきた。

ここで、「環境」を構成する「環」と「境」の二つの漢字の意味を述べてみたい。「環」は、人のつながりを円形あるいは、円い輪郭に見立てていう語、「境」は、区切り目、ある状態と他の状態との分かれ目、ものともものが接する所などがある。

著者は、これらの定義から、「環」と「境」をできるだけ簡潔に表現してみようと試みた。すなわち、「環」は、“あるもの”の周りにあって“あるもの”を存在させている要素、「境」を“あるもの”がそれらの要素と接する部分、としてみた。

すると、例えば一般に、「自然環境」を考える際には、自分と自分の存在を可能にしている自然の要素が自分の周りにあり、それらが自分を囲むように存在し、かつ、要素同士はお互いに関わり合いをもって繋がっている、ということ、これが「環」である。また「境」は、それらの環境要素と自分との区切りを

どこに設定するか、距離感はどうくらいか、すなわち、自分にとってそれらの環境要素はその程度意識しておくべきか（重要であるか）、どの程度の関わりをしていくべきか、ということになる。

「環境」には様々な修飾語が添えられて、様々な環境が語られるが、一度、この原点に立ち戻れば、そして、ひとまず「自分」を“あるもの”として中心に考えれば、あらゆるすべてのことが自分の周りにある「環境要素」として捉えられることができる。また、自分をその周囲の要素と考え、他者を中心に据えて考えることができれば、それは人間関係が該当するのではないかと考えている。

本論文では、その“あるもの”を幼児として、その周りにある「環境」を捉えることにした。そして、「自分」すなわち「人」や「教師」は周囲に置いて考えている。

著者は近年、「幼児教育をもっと豊かに」という方向性の下、「一人一人の子どもたちが将来、生き生きとして、また、豊かな発想力を持つ一人の人として、社会のしくみに関わっていく」ことを願っている。本論文では、幼児教育の日々の現場で見られる子どもの遊びを通して、またそこに関わる大人（幼稚園の先生）を通して、「環境」という視点で、現代の幼稚園教育の有り様を分析し考察した。

[1-2] 幼稚園教育要領とその解説

「遊び集」が発行された当時は平成20年3月に発行された幼稚園教育要領に基づいて幼稚園教育が行われていた。また、同年7月に幼稚園教育要領解説が発行された。現在は、平成29年3月に幼稚園教育要領、また、平成30年2月に幼稚園教育要領解説が発行されているが、本論文では、「遊び集」執筆当時の平成20年度の資料に基づいて考察している。

幼稚園教育要領解説（平成20年3月）では、第1章「総則」の第1「幼稚園教育の基本」に、「*幼児期*における教育は、生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要なものであり、*幼稚園教育*は、*学校教育法*第22条に規定する目的を達成するため、*幼児期*の特性を踏まえ、環境を通して行うものであることを基本とする。このため、教師は*幼児*との信頼関係を十分に築き、*幼児*と共によりよい教育環境を創造するように努めるものとする。」とある。

この文章には「環境」という言葉がすでに二箇所現れている。ここでいう「環境」は、第2章「ねらいと内容」に記されている「環境」とは異なる意味合いであると考えが、「環境」に関わる教育について追究しようとする教育に携わる一人として、意に留めておきたいことである。

その後、引き続き、「これらを踏まえ、次に示す事項を重視して教育を行わなければならない。」ということで、下記の3点が述べられている。

- 1 *幼児*は安定した情緒の下で自己を十分に発揮することにより発達に必要な体験を得ていくものであることを考慮して、*幼児*の主体的な活動を促し、*幼児期*にふさわしい生活が展開されるようにすること。
- 2 *幼児*の自発的な活動としての遊びは、心身の調和のとれた発達の基礎を培う重要な学習であることを考慮して、遊びを通しての指導を中心として第2章に示すねらいが総合的に達成されるようにすること。
- 3 *幼児*の発達は、心身の諸側面が相互に関連し合い、多様な経過をたどって成し遂げられていくものであること、また、*幼児*の生活経験がそれぞれ異なることなどを考慮して、*幼児*一人一人の特性に応じ、発達の課題に即した指導を行うようにすること。

(中略)

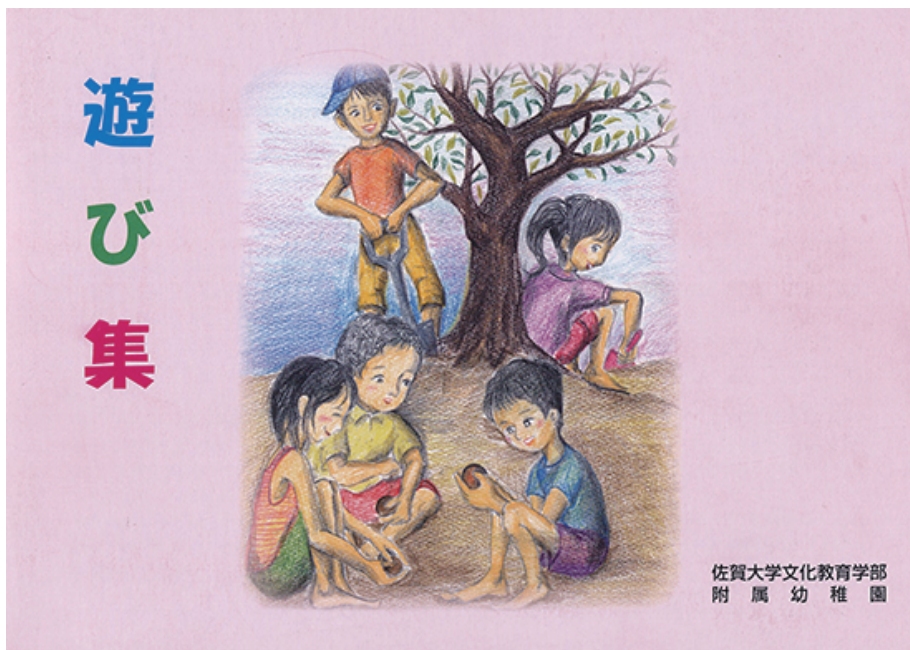
教師は、*幼児*と人やものとのかわりが重要であることを踏まえ、物的・空間的環境を構成しなければならない。また、教師は、*幼児*一人一人の活動の場面に応じて、様々な役割を果たし、その活動を豊かにしなければならない。

第2章「ねらいと内容」において、幼児の発達の側面から、心身の健康に関する領域「健康」、人のかかわりに関する領域「人間関係」、身近な環境とのかかわりに関する領域「環境」、言葉の獲得に関する領域「言葉」及び感性と表現に関する領域「表現」として5つの領域において、幼稚園修了までに育つことが期待される生きる力の基礎となる心情、意欲、態度などを育むためのねらいと、ねらいを達成するために指導する事項が示されている。

そして、「各領域に示すねらいは、幼稚園における生活の全体を通じ、幼児が様々な体験を積み重ねる中で相互に関連をもちながら次第に達成に向かうものであること、内容は、幼児が環境にかかわって展開する具体的な活動を通して総合的に指導されるものであることに留意しなければならない。」ここでも、下線部分は、特に本論文で取り扱う「環境」について関係が深い部分であり、また、文中には「環境」という語句も見られている。

[2] 研究の題材

研究の題材としたのは、佐賀大学附属幼稚園「遊び」研究会が、平成28年1月に発行した「遊び集（第3版）」である（写真1）。当時の園長先生は佐賀大学教育学部の教授が務める制度であったため、附属幼稚園での教育の現場責任者は副園長の庄籠道子先生であった。現在は退職されているが、退職後も幼児教育のために奔走され多忙な日々を送られている。



遊び集には、151個の「遊び」について題名、写真付きで説明が記載されている。その遊びが、いつ（遊びが始まった時期、遊びが続いた時期）、どこで（戸外、保育室、小テラス、大テラス、プール、玄関ホール、ホール）、そして、幼稚園教育要領解説（平成20年7月）の「環境」領域に掲げる11個の内容（前述）がどの遊びに含まれているかが記載されている。特に、151個の遊びについて、解説に掲げる「内容」の（1）～（11）のどれに該当するか、を判断する際に繊細な思考と多大な時間が費やされたことであろう。

「遊び集」に記載されている「遊び」151個について、主に「水が関わる遊び」を抽出し、幼稚園教育要

領に記されている「環境」領域のねらいと内容11項目との関連、また、「環境」領域以外の4つの領域のねらいと内容との関連について調べた。

[3]結果と考察

[3-1]「環境」領域の「ねらいと内容」

ここで、幼稚園終了までに育っていることが期待される生きる力として、「周囲の様々な環境に好奇心や探究心をもってかかわり、それらを生活に取り入れていこうとする力」を育成するため、ねらいとして3項目、内容として11項目が示されているので、記しておく。

1 ねらい

- (1) 身近な環境に親しみ、自然と触れ合う中で様々な事象に興味や関心をもつ。
- (2) 身近な環境に自分からかかわり、発見を楽しんだり、考えたりし、それを生活に取り入れようとする。
- (3) 身近な事象を見たり、考えたり、扱ったりする中で、物の性質や数量、文字などに対する感覚を豊かにする。

2 内容

- (1) 自然に触れて生活し、その大きさ、美しさ、不思議さなどに気付く。
- (2) 生活の中で、様々な物に触れ、その性質や仕組みに興味や関心をもつ。
- (3) 季節により自然や人間の生活に変化のあることに気付く。
- (4) 自然などの身近な事象に関心をもち、取り入れて遊ぶ。
- (5) 身近な動植物に親しみをもって接し、生命の尊さに気付き、いたわったり、大切にしたりする。
- (6) 身近な物を大切にする。
- (7) 身近な物や遊具に興味をもってかかわり、考えたり、試したりして工夫して遊ぶ。
- (8) 日常生活の中で数量や図形などに関心をもつ。
- (9) 日常生活の中で簡単な標識や文字などに関心をもつ。
- (10) 生活に関係の深い情報や施設などに興味や関心をもつ。
- (11) 幼稚園内外の行事において国旗に親しむ。

表1に、「遊び集」に記載されている151個の遊びについて、各領域ごとの内容について、その遊びは該当の内容を含むとして集計された数値を示した。例えば、「環境」領域を見てみると、「環境」領域における内容11項目のうち、151個の遊びの中で最も「その内容を含む」が多かったのが、「身近な物や遊具に興味をもってかかわり、考えたり、試したりして工夫して遊ぶ。」で、127個（84%）の遊びが該当していた。その次に多かったのは、「生活の中で、様々な物に触れ、その性質や仕組みに興味や関心をもつ。」で116個（77%）の遊びであった。

いずれの項目も平成29年度幼稚園教育要領でいう「思考の芽生え」に不可欠な要素である。その後の小学校以降で言われている「主体的で対話的で深い学び」の基盤の一端を担う力である。昨今、幼児期において、これらの内容に関わる遊びが抜きん出て多く、幼児期の子ども達の魅力的な遊びとして捉えられるにもかかわらず、成長するにつれて「身近な物に興味をもってかかわる」「工夫して」「性質や仕組みに興味や関心をもつ」が薄れていくとすれば、その後の子どもの発達における大人（教師や親）の関わり方に

表1.「遊び集」に記載されている151個の遊びと各領域の内容の集計

領域	内容												
健康	先生や友達と触れ合い、安定感をもって行動する。	いろいろな遊びの中で十分に体を動かす。	進んで戸外で遊ぶ。	様々な活動に親しみ、楽しんで取り組む。	先生や友達と食べ物を楽しむ。	健康な生活のリズムを身に付ける。	身の回りを清潔にし、衣服の着脱、食事、排泄などの生活に必要な活動を自分でする。	幼稚園における生活の仕方を知り、自分たちで生活の場を整えながら見通しをもって行動する。	自分の健康をもち、病気の予防に必要な活動を進んで行う。	危険な場所、危険な遊び方、災害時などの行動の仕方がかり、安全に気をつけて行動する。			
遊びの数	151	82	87	145	1	0	28	60	12	52			
割合%	100	54	58	96	1	0	19	40	8	34			
人間関係	先生や友達と共に過ごすことの喜びを味わう。	自分で考え、自分で行動する。	自分でできることは自分でする。	いろいろな遊びを楽しみながら物事をやり遂げようとする気持ちをもつ。	友達と積極的にかかわりながら喜びや悲しみを共感し合う。	自分の思ったことを伝え、相手の思っていることに気付く。	友達よき気付き、一緒に活動する楽しさを味わう。	友達と楽しく活動する中で、共通の目的を見いだしたり、工夫したりするなどする。	よいことや悪いことがあることに気付き、考えながら行動する。	友達とのかかわりを深め、思いやりをもつ。	友達と楽しく生活する中で、できまじりの大切さに気付き、守ろうとする。	共同の遊具や用具を大切に、みんなで使う。	高齢者をはじめ地域の人々などの自分の生活に関係の深いいろいろな人に親しみをもつ。
遊びの数	150	147	133	103	123	108	132	93	33	54	41	101	3
割合%	99	97	88	68	81	72	87	62	22	36	27	67	2
環境	自然に触れて生活し、その大きさ、美しさ、不思議さなどに気付く。	生活の中で様々な物に触れ、その性質や仕組みに興味をもつ。	季節により自然や人間の生活に変化があることに気付く。	自然などの身近な事象に関心をもち、取り入れて遊ぶ。	身近な動植物に親しみをもって接し、生命の尊さに気付いたり、大切にしたりする。	身近な物を大切に扱う。	身近な物や遊具に興味をもつてかかわり、考えたり、試したりして工夫して遊ぶ。	日常生活の中で数量や図形などに関心をもつ。	日常生活の中で簡単な標識や文字などに関心をもつ。	生活に関係の深い情報や施設などに興味や関心をもつ。	幼稚園内外の行事において国旗に親しむ。		
遊びの数	54	116	50	55	22	65	127	90	24	26	2		
割合%	36	77	33	36	15	43	84	60	16	17	1		
言葉	先生や友達の言葉に興味や関心をもち、親しみをもち、話したりする。	したり、見たり、聞いたり、感じたり、考えたりなど、自分なりに言葉で表現する。	したいこと、してほしかったことを自分なりに言葉で表現する。	人の話を注意して聞き、相手によって話す。	生活の中で必要な言葉が分かる、使う。	親しみをもち、日常のあいさつをする。	生活の中で言葉の楽しさや美しさに気付く。	いろいろな体験を通じてイメージや言葉を豊かにする。	絵本や物語などに親しみ、興味をもつて、想像をする楽しさを味わう。	日常生活の中で、文字などで伝える楽しさを味わう。			
遊びの数	136	146	142	71	132	11	53	123	10	20			
割合%	90	97	94	47	87	7	35	81	7	13			
表現	生活の中で様々な音、色、形、手触り、動きなどに気付いたり、感じたりするなどして楽しむ。	生活の中で美しいものや心を動かす出来事や触れ、イメージを豊かにする。	様々な出来事の中で、感動したことを伝え合う楽しさを味わう。	感じたこと、考えたことなどを音や動きなどで表現したり、自由にかいたり、つくったりなどする。	いろいろな素材に親しみ、工夫して遊ぶ。	音楽に親しみ、歌を歌ったり、簡単なリズム楽器を使ったりなどする楽しさを味わう。	かいたり、つくったりすることを楽しく、遊んだりなどする。	自分のイメージを動きや言葉などで表現したり、演じて遊んだりするなどの楽しさを味わう。					
遊びの数	130	87	130	71	102	14	55	67					
割合%	86	58	86	47	68	9	36	44					

1) 「遊びの数」は、その内容項目に該当すると記載されている遊びの数
 2) 割合%は、151個の遊びのうち、該当内容に当てはまる遊びの数の割合

ついて再考しなければならない。

また、3つ目に多かった内容は「日常生活の中で数量や図形などに関心をもつ。」で90個(60%)の遊びが該当していた。

「環境」領域では、これら3つの内容が遊びの要素に多く含まれていた。

逆に、幼稚園における遊びで、「環境」領域であまり見られない内容もあった。「幼稚園内外の行事において国旗に親しむ。」については、2個(1%)の遊び、意外にも「身近な動植物に親しみをもって接し、

生命の尊さに気付き、いたわったり、大切にしたりする。」は22個（15%）と低かった。日常生活の中で簡単な標識や文字などに関心をもつ。」24個（16%）、「生活に関係の深い情報や施設などに興味や関心をもつ。」26個（17%）も少ない方であった。これらの内容については、子どもから自発的な遊びが生まれてい状況が推測されるので、幼稚園の方から意識して積極的に遊びの題材を提供する、活動がなされているものと考えられる。その中で、これらの内容に関しては、子どもの遊びの中で、数量、図形、標識、文字、旗などについて意識させていくか、について、幼稚園の先生も日々、試行錯誤などしながら子どもと接していると思う。そこで、著者から新たに提案があるので、以降、記したい。

【3-2】「環境」領域の「ねらいと内容」と「遊び集」にある遊び

151個の遊びに含まれる「環境」領域の内容11項目の全体を見てみると、項目(1)(2)(3)(4)(7)(8)が多い。(5)(6)が若干少なくなり、(9)(10)(11)はかなり少ない。(9)(10)(11)は子どもから自発的に遊びが展開しにくく、幼稚園側からの働きかけが必要ということであろう。

そして、(5)「身近な動植物に親しみをもって接し、生命の尊さに気付き、いたわったり、大切にしたりする。」についても、予想よりも少なかった。身近な動植物を幼稚園内で十分に育てたり管理したりすることが難しいのではないかと、ということが想像された。

また、(6)「身近な物を大切にする。」については、子どもから自発的に発生する動きというよりも、教諭から促す場面が多くなることが多いということかもしれない。子どもからの遊びの初発と言うよりも、多く「しつけ」に依存することから始まるかもしれない。子どもの遊びとしての自発的な発生回数としては少ないと想像できる。しかしながら、その割合は低くないことは、幼稚園の先生がおりに触れて子どもに言い聞かせている状況が想像できる。

【3-3】「遊び集」に見られる「水遊び」と「水に関係する遊び」

「遊び集」であげられた「水遊び」と「水に関係する遊び」は151個の遊びのうち29個であった。その遊びと内容11項目の番号の対応関係を表2に示す。

【3-3-1】抽出された29個の水に関する遊びと、それぞれの遊びとの関係している項目

水遊びにおける割合が、151個の遊び全体と比べて、関係性の割合が大きく異なった（高かった）項目は、

- (1) 自然に触れて生活し、その大きさ、美しさ、不思議さなどに気付く、
- (3) 季節により自然や人間の生活に変化のあることに気付く、
- (4) 自然などの身近な事象に関心をもち、取り入れて遊ぶ、

の3つの項目であった。151個の遊び全体と比べて、関係性の割合があまり大きく変わらなかった項目は、

- (2) 生活の中で、様々な物に触れ、その性質や仕組みに興味や関心をもつ、
- (5) 身近な動植物に親しみをもって接し、生命の尊さに気付き、いたわったり、大切にしたりする。
- (7) 身近な物や遊具に興味をもってかかわり、考えたり、試したりして工夫して遊ぶ、

の3つの項目であった。

逆に、151個の遊び全体と比べて、関係性の割合が「水遊び」の方が下回った項目は、

- (6) 身近な物を大切にする、
- (8) 日常生活の中で数量や図形などに関心をもつ、
- (9) 日常生活の中で簡単な標識や文字などに関心をもつ、
- (10) 生活に関係の深い情報や施設などに興味や関心をもつ、の4つの項目であった。

表2. 「遊び集」に記載されている29個の水遊びと「環境」領域の内容、11項目の対応

「水遊び」の名前	「環境」領域の内容、11項目の番号										
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
泡遊び		1	1	1			1				
色水遊び	1	1	1	1	1	1	1	1			
絵の具遊び		1				1	1	1	1	1	
洗車	1	1	1	1		1	1				
ぬかるみ料理	1	1	1	1			1				
メダカ池	1	1	1	1	1	1	1	1			
雨の日の散歩	1	1	1	1	1						
絵の具のぬたくり		1				1	1	1			
絵の具を使って		1				1	1	1			
ぶどうジュースづくり	1	1	1	1				1			
川の生き物捕り	1		1	1	1		1				
ムクロジの泡遊び	1	1	1	1			1	1			
ビール屋さんごっこ	1	1		1			1				
火事ごっこ		1				1	1				
泥団子投げ	1	1	1	1			1	1			
素麺流し→豆流し	1	1	1	1			1	1			
染め物	1	1		1			1	1		1	
マーブリング遊び		1		1		1	1	1			
狭義の水遊び11項目											
川工事	1	1	1	1		1	1	1			
水たまり	1	1	1	1				1			
プール遊び	1	1	1	1			1				
水鉄砲	1	1	1	1			1				
水とかくとうする	1	1	1	1	1		1	1			
氷	1	1	1	1		1	1	1			
水が出ない	1	1	1	1			1	1		1	
道路工事	1	1		1			1				
泥海	1	1	1	1							
冬のダム工事	1	1	1	1			1				
水があふれ出す	1	1	1	1			1				
計	23	28	21	25	5	10	25	16	1	3	0
29個中の割合(%)	79	97	72	86	17	34	86	55	3	10	0
151個中の割合(%)	36	77	33	36	15	43	84	60	16	17	1
狭義の水遊び11項目	11	11	10	11	1	2	9	5	0	1	0
29個中の割合(%)	38	38	34	38	3	7	31	17	0	3	0

1)表中の「1」は該当する(含まれる)を示す。

最後に、「水遊び」に該当しない項目は、(11) 幼稚園内外の行事において国旗に親しむ、であった。

[3-3-2] 抽出された29個の水に関する遊びと、それぞれの遊びとの関係している項目

水は、無色透明無味無臭で、環境中に多く存在し、我々の身の周りに普遍的に存在する物質である。水は状況に応じて、その形を変え、動きを変え、音も出るが、あまりにも身の回りに当然のごとく存在するため、その特殊性に気づくことはほとんどない。水のように無色透明の液体は多いが、その中でも水だけが特殊な性質を示す物質である。それは、沸点、融点あるいは小学校～高等学校にかけて学ぶ。粘性もその一つの性質である。水は粘性が高い(ネバネバした)液体の一つである。水のこの性質が子どもの五感に多くの感覚情報の発達をもたらす、ということ改めて水の性質を通して記載している教育論文を頻繁には目にしないが、幼児教育に携わる人に比較的文科出身氏の先生方が多く、あるいは理系に関する一定の知識や技能があっても、文科と理系を融合したような(均等に修得した)「自然(環境)」の総体として体得して、幼稚園教育に携わる大人が相対的に少ないからではないだろうか、と推測している。

[3-3-3] 「水が(何らかの形で)関わる遊び」と「水に焦点化した遊び」

水に関する遊びは大きく2つに分類し、狭義のほぼ「水」しか使わない遊び(水に焦点化した遊び)と、水以外の泡、色水、絵の具など水を用いるが何らかの水以外の要素が関わる遊びとに分類してみた。

幾つかの水遊びについて「遊び集」の説明を抜粋して引用する。

①川工事：

年中児は砂場に水を流して川を作っている。年少児はその傍らで小さな穴を掘ったり少量の水を流して遊んでいる。砂を触ろうとしない子どもも保育者と一緒に遊ぶことで慣れ始め、自ら砂や水の感触を楽しむようになる。年中児は、雨どいやホースを友達と協力して運び、つなぎ合わせて水を流す川工事を始める、、、

②水たまり：

雨上がりの堰堤にできた水たまりで、子ども達は長靴で入ってバシャバシャ水が跳ねるのを楽しむ。砂場の砂の感触と違って、ほどよく水気のある泥の感触がとてもこころ良いようである、、、

③プール遊び：

「蒸し暑い時期なので、冷たい水に身体を浸すことを喜び」「手のひらや足を使って、歌を歌いながら演奏、タプタプ、バシャバシャ、手のひらの形でも、出る音が違う」、、、

④水とかくとうする：

ビニールを雲梯の上に干していたら、夜の間の雨で水がたまっていた。ずっしりとした丸みや重みを楽しみ、持ち上げようとしても持ち上がらない。友達と一緒に押し上げると水が零れ落ちて下にいた子どもがびしょ濡れになり歓声をあげる。何度も押し上げ、反対から引っ張り水は少しずつ落ちていく、、、

⑤氷：

冬の寒い日、メダカ池に氷が張っていることがある。取って眺めて、指の冷たさに騒ぎ、袋に集めたり、道に投げて割ったり、足で踏んだり、滑ったりしている。年少児が、持って帰ろうとして袋に入れていたところ、降園時間になると「水になっている」、氷が溶けて水になる不思議、、、

⑥水が出ない：

砂場に置いてある洗濯機の排水ホースや雨どい、、、子ども達は、ホースを水道の蛇口につないだり雨どいを使って砂場に水を引き込む。水たまりができ、川ができ、、、雨どいに水を流すと、低いところから高いところへは水が流れないことを知る。落ち葉を流して水の流れを見る、水が出ていた

排水ホースの先を持ち上げると水が出なくなる。子ども達は「あれ？」という表情をしてホースの口を覗く。排水ホースから手を離すと砂場に落ちたホースからまた水が出始める。これを繰り返す。いつか学校で役立つ経験をする,..

⑦冬のダム工事：

子ども達は、夏の間盛りに上がっていたダム工事（川やダムを作る）という楽しい遊びを冬場の寒い時期に始めてしまうことがある。やってみて水が冷たすぎることに気がついて「冷たい！」と慌てて靴を履いたり、濡れないように工夫して、ダムを掘り進める。大きなダムを仲間と力を合わせて作り上げる達成感を季節を越えて感じている,..

⑧水があふれだす：

朝から砂場に水が入り、川が伸びて太くなり、砂場が池のようになる。園庭に水があふれ出し、板で堤防を築いても無駄。年長児が土手を作ったり、板の堤防も増やしたが溢れる水を阻止できない。諦めて砂遊びしていた,..

これらの「水遊び」（狭義の水だけで遊ぶ「水遊び」）に含まれている（関係性が深い）項目は5つであった。

- (1) 自然に触れて生活し、その大きさ、美しさ、不思議さなどに気付く、
- (2) 生活の中で、様々な物に触れ、その性質や仕組みに興味や関心をもつ、
- (3) 季節により自然や人間の生活に変化のあることに気付く、
- (4) 自然などの身近な事象に関心をもち、取り入れて遊ぶ、

の4つの項目は、ほぼ満たしていた。

また、(7) 身近な物や遊具に興味をもってかかわり、考えたり、試したりして工夫して遊ぶ、も関係性が高かった。

水は、液体（流体）であり、存在する状況に応じて形を変化させ、動きも多様で、水の動きに応じて様々な音を発する、子どもにとっては魅力的な遊び道具（対象）である。

まさに、子どもにとって、大きさ、美しさ、不思議さ、性質、仕組み、季節、など興味の対象になる。水と様々な要素が関わる他の遊びについても(1)～(4)は高く、また、(7)についても、「興味をもってかかわり、考えたり、試したりして工夫して遊ぶ」は同様に高いが、水に焦点化した遊びでは、特に(1)～(4)については満点なのである。

[3-4] 内容11項目に該当する数が多い「遊び」（水遊び以外）

上記のように、「水遊び」は子どもにとって魅力的で、特に内容項目(1)～(4)に関して子どもの発達を促す最適な物質であると考えられる。

ここで、「水遊び」以外の他の遊びも含んで考えてみたい。151個の遊び全体のうち、最も該当する項目数が多かったのが「お店づくりから、まつタウン」であった。

「環境」領域の11項目のうち9項目が該当した。該当しなかった項目は、(5)「身近な動植物に親しみをもって接し、生命の尊さに気付き、いたわったり、大切にしたりする。」、(11)「幼稚園内外の行事において国旗に親しむ。」であった。「お店を開いて運営する」ためには、空間、物、人という要素を整合させなければならない。自分の周りの環境要素として「環境」領域以外の他の4つの領域に関する内容も多く取り入れられなければならないし、実際取り入れられていた。すなわち、「健康」領域で6項目（10項目のうち）、「人間関係」領域で9項目（13項目のうち）、「言葉」領域で6項目（10項目のうち）、「表現」領域

で7項目（8項目のうち）であった。

幼稚園における現実の場面では、この遊びはそれまでの遊びの続きということで発生したようである。年長Ⅳ期（運動会の頃～12月）ということで、もう直ぐ幼稚園卒園-小学校入学という時期である。幼児期終盤ということで、5つの領域すべての該当項目の合計数が最も多かったのではないだろうか。

次に多かったのは、「色水遊び」と「メダカ池」であった。それぞれ8項目が該当した。「色水遊び」「メダカ池」ではいずれも該当しなかった項目が同じで、(9)「日常生活の中で簡単な標識や文字などに関心をもつ。」、(10)「生活に関係の深い情報や施設などに興味や関心をもつ。」、(10)「幼稚園内外の行事において国旗に親しむ。」であった。

該当する項目が7個以下になると該当する遊びの数は急に増加するので、ここでは記載を割愛するが、ほぼすべての遊びで、5つの領域で掲げられている項目が重複した。

〔3-5〕項目（10）に該当する数が多い「遊び」

「環境」領域の内容項目(10)は、「生活に関係の深い情報や施設などに興味や関心をもつ。」である。この項目の内容を含む遊びとして挙げられるのは、前述した「お店づくりから、まつタウン」のほか、「花火レストラン」「回転お好み焼き」「おひなさまとお琴」「パン屋さんごっこ」「郵便屋さんごっこ」「絵本屋さん・図書館ごっこ」「学校ごっこ」「ドーナツ屋さんごっこ」「お寿司屋さんごっこ」「結婚式ごっこ」「病院ごっこ」「ぬいぐるみとごっこ遊び」「お医者さんごっこ」「モデルショー～ふぞくガールズコレクション～」(モデルごっこ)などである。実際に街にある施設の名前を付した「ごっこ」遊びが多い。中でも、「モデルショー～ふぞくガールズコレクション～」(モデルごっこ)は、ホールのステージを舞台として、BGMをかける大人の世界でのモデルショーに近い遊びのようである。「ごっこ遊び」の意義については様々に語られている。「ごっこ遊び」をする子どもの遊びの世界で、大人がどのような振る舞いをして、子どもと関われば良いか、について振り返って考えさせられる遊びである。

「おひなさまとお琴」では、3月のひな祭りの飾りつけに合わせて、ひな壇の飾りつけや琴という楽器に触れることを通して、社会についても語っていくという、先生の側が教育の本質を丁寧に考えざるをえない遊びも見られて、幼稚園教育の深遠さを感じる場所である。

「こびと探し」では、「こびと大百科」を手に、実際にはいないであろう「こびと」を探しに園庭を探したり街に出て地域の人と接したり、そしてこびとは見つけれなかったが、自然の中での生き物探しに自然に移っていく、という光景は子どもが成長していく姿として鮮明に目に映るのである。

〔3-6〕項目（11）に該当する数が多い「遊び」

項目11に該当する遊びは「万国旗づくり」のみであった。これは運動会用の旗を子どもたちとつくる活動である。ただ、いわゆる行事の準備としての活動ではなく、子どもの自発的な遊びに展開させていくという先生の力量をも感じさせる遊びである。一番人気は日本の旗だったようだが、大人になっても日本の旗（日の丸）が「安定した情緒の下で」に資するためには、他領域とのどのように関連した内容をつなげばいいであろうか。

〔4〕総括

〔4-1〕身近な環境とのかかわりに関する領域「環境」

「環境」領域については、幼稚園教育要領においてねらいや内容が明確に示されており、我が国の幼稚園等ではこれに基づいた教育が行われている。

「環境」の意味することについて総括しておきたい。「人」を、環境を考える上での中心（“あるもの”）に据えて、その周囲にある環境要素を考える場合、幼稚園教育要領でいう「環境」の要素としては、自然（生物を含む）およびその事象、（日常）生活、それらに関わる物（図形、標識、施設、国旗などを含む）、に関する要素、が記載されている。領域は5つに区分されているので、「環境」領域が関わる対象として問題ないと思えるが、留意しておかなければならないことは、幼稚園教育要領においても、いわゆる「環境」領域で意味していることとは異なる別の意味の「環境」という言葉が現れている（「環境」に別の意味づけを与えている）ことを確認しておいてほしい。

例えば、「*幼児期における教育は、生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要なものであり、幼稚園教育は、学校教育法第22条に規定する目的を達成するため、幼児期の特性を踏まえ、環境を通して行うものであることを基本とする。このため、教師は幼児との信頼関係を十分に築き、幼児と共によりよい教育環境を創造するように努めるものとする。*」

ここでいう「環境」は「環境」領域でいう「環境」とは異なっていると考え。そして先生は、幼児と人やものとの関わりが重要であることを踏まえ、物的・空間的環境を構成しなければならない。「環境」という言葉の前に、様々な修飾語が付されて「環境」の対象を限定することが多いが、「環境」領域を指導する先生が留意しておかなければならないことは次の点である。少し平易に具体的な状況を想定して記載してみたい。幼稚園の先生として5つの領域のうち「環境」領域を担当することになった、という状況を仮定してみよう。実際にはそのように領域それぞれに先生が担当として割り当てられることはないと思えるが、その先生は、おそらく自分の担当として「環境」領域だけを考えて活動しておけば良い、とは考えないであろう。今後、小学校高学年でも専科の教員が配置されるという案もある。現実、中学校から高等学校にかけては、専科の先生が授業を行っている。しかし、幼稚園の教員は、専科ではいけないのではないか、いうことである。改めて記載することではないかもしれない。

「環境」領域を考える（考えている）ということは、「環境」領域のねらいと内容だけを考えている、という（先生の）状態ではなく、他の4つの領域のねらいと内容も同時に考えている、ということである。言い換えれば、4つの領域「健康」「人間関係」「言葉」「表現」で身につけさせるべきすべてのことは、“人（自分）”あるいは目の前の子どもを中心に据えて、自分（子ども）を存在させてくれる周囲の環境要素だからである。その項目数は5つの領域すべてを合わせると、52個に及ぶ（健康10、人間関係13、環境11、言葉10、表現8）。

[4-2] 「遊び集」にある「水遊び」を通して「環境」を再考する

H29年度幼稚園教育要領でいう「幼稚園教育において育みたい資質・能力」及び「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」として、「幼稚園教育において育みたい資質・能力」

- (1) 豊かな体験を通じて、感じたり、気付いたり、分かたり、できるようになったりする「知識及び技能の基礎」
- (2) 気付いたことや、できるようになったことなどを使い、考えたり、試したり、工夫したり、表現したりする「思考力、判断力、表現力等の基礎」
- (3) 心情、意欲、態度が育つ中で、よりよい生活を営もうとする「学びに向かう力、人間性等」

「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」

(1) 健康な心と体

幼稚園生活の中で、充実感をもって自分のやりたいことに向かって心と体を十分に働かせ、見通しを

もって行動し、自ら健康で安全な生活をつくり出すようになる。

(2) 自立心

身近な環境に主体的に関わり様々な活動を楽しむ中で、しなければならないことを自覚し、自分の力で行うために考えたり、工夫したりしながら、諦めずにやり遂げることで達成感を味わい、自信をもって行動するようになる。

(3) 協同性

友達と関わる中で、互いの思いや考えなどを共有し、共通の目的の実現に向けて、考えたり、工夫したり、協力したりし、充実感をもってやり遂げるようになる。

(4) 道徳性・規範意識の芽生え

友達と様々な体験を重ねる中で、してよいことや悪いことが分かり、自分の行動を振り返ったり、友達の気持ちに共感したりし、相手の立場に立って行動するようになる。また、きまりを守る必要性が分かり、自分の気持ちを調整し、友達と折り合いを付けながら、きまりをつくったり、守ったりするようになる。

(5) 社会生活との関わり

家族を大切にしようとする気持ちをもつとともに、地域の身近な人と触れ合う中で、人との様々な関わり方に気付き、相手の気持ちを考えて関わり、自分が役に立つ喜びを感じ、地域に親しみをもつようになる。また、幼稚園内外の様々な環境に関わる中で、遊びや生活に必要な情報を取り入れ、情報に基づき判断したり、情報を伝え合ったり、活用したりするなど、情報を役立てながら活動するようになる。また、公共の施設を大切に利用するなどして、社会とのつながりなどを意識するようになる。

(6) 思考力の芽生え

身近な事象に積極的に関わる中で、物の性質や仕組みなどを感じ取ったり、気付いたりし、考えたり、予想したり、工夫したりするなど、多様な関わりを楽しむようになる。また、友達の様々な考えに触れる中で、自分と異なる考えがあることに気付き、自ら判断したり、考え直したりするなど、新しい考えを生み出す喜びを味わいながら、自分の考えをよりよいものにするようになる。

(7) 自然との関わり・生命尊重

自然に触れて感動する体験を通して、自然の変化などを感じ取り、好奇心や探究心をもって考え言葉などで表現しながら、身近な事象への関心が高まるとともに、自然への愛情や畏敬の念をもつようになる。また、身近な動植物に心を動かされる中で、生命の不思議さや尊さに気付き、身近な動植物への接し方を考え、命あるものとしていたわり、大切にすることを覚えるようになる。

(8) 数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚

遊びや生活の中で、数量や図形、標識や文字などに親しむ体験を重ねたり、標識や文字の役割に気付いたりし、自らの必要感に基づきこれらを活用し、興味や関心、感覚をもつようになる。

(9) 言葉による伝え合い

先生や友達と心を通わせる中で、絵本や物語などに親しみながら、豊かな言葉や表現を身に付け、経験したことや考えたことなどを言葉で伝えたり、相手の話を注意して聞いたりし、言葉による伝え合いを楽しむようになる。

(10) 豊かな感性と表現

心を動かす出来事などに触れ感性を働かせる中で、様々な素材の特徴や表現の仕方などに気付き、感じたことや考えたことを自分で表現したり、友達同士で表現する過程を楽しんだりし、表現する喜びを味わい、意欲をもつようになる。

が掲げられている。

上記に挙げた「水遊び」には、10項目のうち(8)以外の項目は濃淡はあるかもしれないが、全て含まれている。そして、「水遊び」は内容項目の(1)～(4)及び(7)に関して子どもの発達に大きく寄与し、「水遊び」だけでは十分に伸ばしきれない項目は「水遊び」以外の遊びで伸ばすことができる。そして、151個の遊び全体で見れば52項目にわたる内容を網羅できる。

上記(1)～(10)を伸ばす活動を展開し「*幼児期の終わりまでに育ってほしい姿*」を達成する。幼児教育に携わる大人が意識しておきたいこととして提案したい。

教育要領は「要領」であるので、物事を行う上での重要な(不可欠な)点、と考える。ただ、取組の結果が保障されているわけではない。その結果を見通しながら取り組み、より良い教育を目指す努力を継続することが大人(先生や親)のすべき一点であろう。

自然科学分野では、生態系(森林)が持つ機能を、供給サービス、調整サービス、文化的サービス、基盤サービスの4つの機能に分解して生態系(森林)の機能をわかりやすく説明する活動がある。生態系(森林)は4つの機能を有し、人類はそれらのサービス(恩恵)を受けて生存できている、という趣旨である。意識しておかなければならない重要なことは、例えば、これら4つの条件を満たす人工的な空間を創り出すことができても、それは本来の生態系ではないし生態系(森林)を創造(復元)できたことにはならない、ということであろう。

幼稚園教育要領に示されている5つの領域のねらい及び内容項目(52項目)を教育現場で忠実に実行することはおそらく困難であろう。5領域の活動自体は個別に(一つ一つ)設定できても、子どもがそれらの活動から得ていく資質・能力は5つの領域にわたっている。逆にある領域の1つの内容項目を設定して何らかの活動をすることは、他の領域が示すねらいや内容の達成にも十分意義があることである。

教育基本法が掲げる第1条「教育は、人格の完成を目指し、」の人格の完成を目指すためには、幼稚園などの組織あるいはチームとして、「環」と「境」の二つの漢字が成立させている「環境」の意味するところを調整し、役割分担して組織としてチームとして実践していくことは重要なことである。ここで意識しなければならないことは、役割分担が成立する基盤として、分担者間の極めて密な連携がなければ総体にならない、ということである。

しかし一方で、個人の中に、その総体を有しなければ、真に子どもに向き合う教育はできないことも真実ではないだろうか。その総体を構成する一つの要素として、「自然環境」を追加したい。大人(先生や親)がそれぞれ自分の中に「自然」を有すること、大人が「自然環境」であること、は大切なことである。

最近、「カリズマティック・アダルト」という言葉を聞くことがある。それは、「時に優しく、時に厳しく見守りつつ、指導してくれる大人」「自分のことを丸ごと受け止めてくれる人」である。子どもの心を支えてくれるもの(心をほぐしてくれるもの)、「自然」はそのことを実現する一要素ではないだろうか。

これからの大人は先生も親も含めて、理系と文系を区別することなく、両方の領域・分野・教科で習うような事象を、理系と文系の両方の見方、考え方を持って見つめて子どもに接することができる人を目指すべきではないだろうか。得意、不得意の意識もなく、新しい領域などに挑戦し、日々試行錯誤しながら、思考を続けながら教育という営みを行うことが大切である。

[5] 結論

今回、分析した題材の「遊び集」の最も重要な点は、151個の遊びについて、幼稚園教育要領が定めた

5つの領域それぞれについて該当する（含まれる）11項目を対応付けたところである。このような詳細な解析が行われてまとめられた書物に初めて出会った。その当時の副園長先生と幼稚園の先生方の労力は多大であったに違いない。遊びの一つ一つがそれぞれの項目に確かに結びつくことを感じる。

本論文では主に「環境」領域について、内容項目11項目と遊びを幾つか取り上げて分析したが、その結果、5領域について定量的に抽出できた部分があるものの、多くの項目とその遊びは5つの領域それぞれに関連し合っていて不可分で、その総合的な成果としての一人一人の子どもの成長を感じるところでもある。

「水遊び」29個についても、11項目との関連性を調べた結果、水の持つ独特の流体としての性質が子どもに魅力で興味・関心を引いている。水は、その独特な性質ゆえに、子どもが自然を親しむ上で、まず最初に接する自然環境要素の一つであるが、もちろん子どもにはそのような意識はない。しかし、成長して大人になっても、「水」についての興味・関心の深さが持続するようである。このことは、著者の環境関連科目における大学生への調査で、環境関連の取り組みとしてどのような環境要素と関わりたいか、あるいは、どのような環境関連の仕事に就くならばどのような内容を希望するか、というアンケートにも明瞭に現れる。「水」についてのテーマや職業に対する魅力は高い。ヒトの周りには「水」以外にも大気や土など多くの環境要素があるのに、である。

もちろん、子どもが水に限らず、自然に関する事象について学ぶのは小学校入学後以降である。数量、図形、標識、文字などといった項目(9)～(11)については、水遊び以外の遊びが基礎となり、小学校以降では理科に限らず幾つかの教科、科目で学びを深めていく、といえよう。

幼児期の子どもに関わる大人としては、子どもの将来（小学校から高等学校）を考え、たとえ幼稚園の先生といえども、高等学校までの（ここでは理科に関する）知識や技能は修得しておいたほうが望ましい。それでも自身に「自然」を根付かせることは難しいかもしれないが、最低限、高等学校までの内容は知ってほしい。その大人が努力してきた背景が「カリスマティック・アダルト」として、子どもに響くのではないだろうか。そこにはマニュアルやハンドブックを超えた、もっと大事なことが潜んでいる。

このことを実現するために、領域に渡って（領域横断的に）それぞれの内容の相互補完性を意識しようとする取組も良いと考える。「環境」分野における教育・研究に携わる者としては、「環境」領域に加えて、その領域では不十分な点あるいは逆に十分他領域に貢献できる点を、我々が常に意識している状況で子どもに対面する時のみ、教育要領が指し示す方向性を的確に捉えその実現に近づくことができるのではないだろうか。そのことを、ある領域を担当する先生は、他の4つの領域を専門とするそれぞれの関係者との関わりの中で探り、日々俯瞰的視点を持って実践する営みこそ重要である。

参考文献

1. 幼稚園教育要領（平成20年3月）
2. 幼稚園教育要領（平成20年7月）
3. 「遊び集（第3版）」、佐賀大学文化教育学部附属幼稚園「遊び」研究会、研究同人、平成28年1月発行
4. 幼稚園教育要領（平成29年3月）
5. 幼稚園教育要領（平成29年3月）
6. 土井晶子、保育内容「環境」と小学校教育課程につながる保育者養成授業プログラムの検討（1）～子どもの数量・図形、文字等への関心・感覚～、共栄大学教育学部研究紀要, 2, 95-108 (2018).
7. 大坪 祥子、幼稚園教育要領の領域「環境」の捉え方の変遷、宮崎学園短期大学紀要, 10, 25-33 (2017).
8. 横井 一之、齋藤 公彦、小野 克志、海老原 孝一、金森 由華、領域「環境」における季節感の指導について：本邦幼稚園や保育園の現状、海外の幼稚園の比較も含めて、鈴鹿短期大学紀要, 33, 227-242 (2013).